
向日葵の君

紗妃

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

向日葵の君

【コード】

N5712A

【作者名】

紗妃

【あらすじ】

ジリジリとうだるような夏の日、僕は君に逢いに行く。自転車をこいで、一陣の風となって。

背中から前へと押し抱くように聳える濃緑の山々は、さながら、油蟬達の凝縮された生を賛美し、命の滾りを思う存分謳歌させるスピーカーの役割を買って出たらしい。彼等の大合唱が塊となって僕の背を押すようだ。

それにしても、暑い。

焼けるような陽射しが、真上から容赦なく大地を焦がす。

あつい！

こめかみから顎に向かい、汗が滝のように流れ落ちていく。

それでも僕は、右、左と交互に、両の太股に掛ける力を弛めない。上半身を前のめりに倒し、腰を高く上げ、左右に躰を思い切り揺らしながら重いペダルを漕ぐ。

もう少し。

右脚に全体重を掛ける。

次いで左脚。

あと一漕ぎだ！ あそこさえ越えれば……！

躰を大きく右に傾ける。躰がゆっくり沈んでいく。

顎の先を汗が滴り落ちた。

刹那……。

パツと開けた視界。心地よい向かい風が、火照った頬を撫でる。

眼の前には小さな港街。だだっ広い畑の真ん中を突っ切るこの細い坂道は、街まで真っ直ぐ続いている。両脇を彩るのは背の高い向日葵並木。黄金色の花の匂いが充満して、苦しいくらいだ。

視線を少しだけ上げれば、奥に広がるのは真っ青に澄んだ一面の大海原。

空の蒼と海の青を分けるのは真っ白な入道雲の役目だ。それは天球を支える巨人さながらに立ち上がり、両手を一杯に広げて僕を迎えてくれるよう。彼の頭上から、くぐり天球を描いて僕の背後まで、

夏の濃い蒼空が広がっている。

坂道を一直線、ブレーキもそこそこに飛ぶように駆け下る。

襟元から入り込んできた風が、シャツの背中を帆のように膨らませる。慌てて釦を外すと、裾が風にはためき、抵抗から解放された僕の躰は更にスピードを増す。

黄金の草原から、深い深い蒼に向かって飛び出していくような気分になる。

爽快！

さつきまで五月蠅いくらいに響いていた油蝉の声さえ遠退き、風の音だけが渦巻いて鼓膜を叩いている。

違う。

僕自身が風になったんだ。

僕は風だ。

透明な風。

どこまでだって飛べる。

だって、ほら、大空は両手を広げ、僕を受け入れてくれるじゃないか！

白い壁。赤銅色の屋根。この街唯一の駅舎に到着したのは、暑さ真つ盛りの午後一時五分前。

一時間に一本きりの電車。到着時刻は午後一時丁度だ。

自転車のスタンドを倒すことさえまどろっこしく、倒れるに任せて、僕は舎内へと駆け込んだ。改札をすり抜け、そのままホームへと直行する。

二、三人の大人が、タオルで汗を拭いながら電車の到着を待っていたが、誰も僕を責めやしない。

のんびりとした田舎街。

ホームの端では、白のワイシャツ、濃紺の制帽を目深に被った駅

長さんが、跳ね返りの陽射しに眉を顰めながら電車の進入を促している。

もうすぐだ。

僕の心臓がドキドキと高鳴る。鳴り止まないのは、自転車を飛ばしすぎたからなんかじゃない。

8月の今日。約束の日。

この小さな駅に、僕は君を迎えに来た。

白いセーラー服、長いおさげ髪の君は、きっとこの街の風景に似合うだろう。

だって、ここは僕の故郷。僕の大好きな街なのだから。

にやけてしまうのを誤魔化したくて、わざと空を見上げた。天球の中央から降り注ぐ射るような陽射しは、少し強めの海風に和らげられて、今の僕には逆に心地良い。

その時……。

ガタン、ガタン。

規則的な低い音が、最初は小さく、次第に大きく耳朵を打つ。誘われるように視線を送れば、ジリジリと照りつける太陽光に熱せられたコンクリートから湧き上がる、揺らめく大気の中、蜃気楼のようにゆらゆらと現れた白と緑のストライプ。一両編成の電車がホームへと滑り込んできた。

耳の奥でドキドキがどんどん大きくなる。周囲に聞かれないかと心配になるほどだ。

最初に、何を言えばいい？

暑かったかい？ …… 当たり前だ。

ようこそ。 …… なんか気取ってる。

それより、それよりも、一番大切なことは……！

少し邪な僕の考えを邪魔するように、ガタガタと大きな音を立て、三つしかないドアが開いた。

僕のドキドキは最高潮。胸が痛いくらいだ。

手を繋いでも、 …… いい、かな。海を背にする坂道、向日葵の花

を渡しながら、出来るだけ然り気なく。……なんて、そんなことを考えていると、暑さとは別の汗が吹き出してくる。

ええい！ もう、どうとでもなれ！

僕は顔を上げ、君の姿を探した。

一番先頭のドア、独りだけ降り立った女性。長い黒髪と白いワンピースが海風に靡く。胸に抱いた白い花束。

君だ！

ドキドキは、瞬間、どこかに消え去り、何も聞こえなくなる。頭の中は真っ白だ。あれこれ考えていた言葉なんか、何一つ出てきやしない。

嬉しさに何も考えられないままに、僕は手を振る。

君が気付いてくれるように。

僕の大好きな笑顔を、……向日葵のように眩しい笑顔を、僕に向けてくれるように。

手を振る。

大きく、大きく手を振る。

思い切り大きく、手を、振る。

手を、振って……。

僕の横を通り過ぎていく、君。

気付かない？

なぜ……？

振り向きざま、君の背に手を伸ばす。

指を伸ばし、柔らかなワンピースの肩に、もう少しで触れそうになっ……。

けれど、僕の腕は力無く落ちていった。

……ああ、そうか。

君には僕が見えないんだ。

君のいる世界と、僕が今いる世界は、もう、違うんだ。

思い出した。
思い出して、僕は哀しくなった。

そうだ。あれは十年前。八月の今日。夏真っ盛りの晴天の日のことだった。

僕は、この駅に君を迎えに来た。迎えに来て、……けれど、君と手を繋ぐことはできなかったんだ。

あの日、僕の時間は止まってしまった。

動かない、静止したままの時の中で、僕は足掻いていたんだ。繰り返し、繰り返し、八月の今日、君を迎えに来ることを繰り返し、澱んだ空間の中を行ったり来たりしていたんだ。

そして、全ては僕だけを残していった。

立ち止まっているのは僕独りだけ。

君の時間は十年間、ちゃんと流れていたんだよね。

少し強い潮風が、君と僕との間を通り過ぎていく。

……そうだね。

十年前の今日、約束を守れなかったのは僕。なのに君は、それでも君は、毎年必ず、八月の今日、この駅に降り立ってくれたんだ。白い花束を僕に手向けるために。嘔吐きの僕を、一言も責めることさえしないで。

ごめんね。

君との約束、守れなくてごめんね。

嘔吐きで、ごめんね。

十年の歳月は、きつと君にとって、とても長くて重かっただろう。ごめんね。ごめん。

でも、それも、今日で最後。

もう君は、この駅に降り立つことはない。

君の左手の薬指に光る綺麗な指輪が全部教えてくれた。それをくれた人は、きつと素敵なひとなんだろうね。すごく綺麗になった君。なにより、君が取り戻してくれた向日葵の笑顔。

君は幸せに向かって歩き出していくんだね。
充分だ。
それだけで、僕はもう充分だよ。

君と並んで向日葵の道を歩くのも、きっと、これが最後。
だから、……ごめんね、ほんの少し、いつもより距離を縮めたりして。

気付けば、吹き抜ける夏の風は、微かに涼しさを纏い始めている。
空の蒼も深さを増し、透明度をも増して、次の季節へ移ろう準備をしている。

そうだね。

時は決してとどまることなく流れ続けていくんだ。

動けなかったのは僕だけ。前へ進めず立ち止まっていたのは、僕
独りだけ。

どんなに望んでも、僕の時間は、もう君には追いつけない。
そうだね。

僕はもう、行かなければいけないんだ。僕が本当に居るべき場所
へ。

幸せそうな君の笑顔が、僕の背を押してくれた。だから僕は風
なり、空の果てまで飛んでいけるよ。

ありがとう、大好きな君。
ありがとう、向日葵の君。

夏の太陽のような君の笑顔を、僕は決して忘れない。

了

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5712a/>

向日葵の君

2009年2月17日08時09分発行